

# 集合的記憶の文化社会学

## ——宮城学院創立記念誌『期にいたりて実を結び』の 内容分析——

片瀬 一男

### 1. はじめに：集合的記憶による学校的身体文化の再帰

#### 1.1 歴史研究と集合的記憶

フランスの社会学者、モーリス・アルバックス(Maurice Halbwachs)は、個人が記憶を再生・想起する場合でも、再生された記憶が集合的性格をもつことを強調した。というのも、記憶の再生という作業には、その個人が当時所属していた集団の集合的枠組みが動員されるからである(Halbwachs 1968=1989)。この点で、彼の「集合的記憶」の概念は、共同で生きられた体験—それが学校体験であれ、宗教・戦争体験であれ—に関する歴史社会学的研究によって重要な位置を占める。

過去の所属集団の集合的枠組みがとりわけ強烈に想起される場の1つとして、同窓会がある。それは多感な人間形成の体験を共有した人々の集団的枠組みにもとづいて、過去が集団的に再生され、再解釈される場であるからだ。たとえば、黄(2002)は、北関東の高等女学校で戦時期を過ごした人人の同窓会文化をインタビューによって分析した。黄(2002)もまた、過去の時間は現在にも存続し、過去の自分を想起する条件として個人の現在の意識を枠づけ、さまざまな「思い出」を配置させることで、過去を再構築さ

せるというアルバックスの言 (Halbwachs 1968 = 1989 : 159-162) に依拠しながら、同窓会は、同窓生たちの「身体は現在にしながら、過去を喚起、再生し、その想像のなかで反省・熟考する空間」であり、「彼女らたちによって自らの記憶の再構築作業を共同で行う空間」と規定する (黄 2002 : 208)。この点で、「記憶再生の共同体」としての同窓会は、「反省的空間」(黄 2002, 208) または「再帰的身体空間」(黄 2002 : 9-13) であると、とらえることができる。「再帰的身体空間」としての同窓会では、過去の「学校的実践の場」と現在の「学校的記憶の場」が交錯し、両者の間には「再帰性」がはたらく。すなわち「生きられる学校的身体」の象徴空間を現在の枠組みから想起して意味づける一方、その意味づけにもとづいて現在の生の意味が改めて内省される。

また、ここで「再帰的身体空間」という語を使うのは、再帰されるものが「学校的身体文化」すなわち学校において身体化された文化資本としての「ハビトゥス」であることによる。「ハビトゥス」とは、P.ブルデュー (Pierre Bourdieu) によって「構造化する構造として構造化された構造」すなわち「持続性をもち移調が可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造 (structures structurantes) として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造 (structures structurees)」(Bourdieu 1980 = 1988 : 83, 傍点原文) と定義されたものを意味する。換言すれば、ハビトゥスとは、過去の生活史によって身体に刻み込まれた持続的な性向であり、個人はそうしたハビトゥスにしたがって現在の日常的な実践を生み出すとともに、将来のライフコースを表象したり、展望することになる。

## 1.2 戦時下の高等女学校で身体化された学校文化：「節約」というハビトゥス

ここで黄（2002）による高等女学校の同窓生の分析に立ちもどると、彼女たちが戦時期の高等女学校の学校文化によって身体化した文化は、戦後期の長い時間のなかで変容されつつも持続し、それぞれの場（Champ）の論理にしたがって、発現されたことになる。ハビトゥスは文字通り身体に刻み込まれた無自覚的な性向であるから「過去の記憶は忘却してしまったにもかかわらず、過去に身体化した実践のハビトゥスは、現在なお無意識のうちに現れ続けるのである」（黄 2002：213）。

こうしたハビトゥスの持続と変容は、たとえば「節約の態度」（「もったいない」と思うハビトゥス）に見出すことができる。昭和前期の高等女学校に入学してくる少女たちは、比較的富裕な階層の出身で、入学以前に華道・茶道といった伝統的芸事を家庭教育で身につけて高等女学校に入り、皇民思想にもとづく「良妻賢母教育」を受けることになる。その一方で、戦時下の物資不足のなかで彼女らは、家事における「節約」の重要性を身体化することになる。賢く家事を切り盛りし、家計を健全に保つことこそ、「良妻賢母」の条件であるからである。この「節約」のハビトゥスは、黄（2002：222-223）によれば、戦後も持続的に保持された。しかし、同窓生へのインタビューによれば、高度経済成長を経て豊かな消費社会を迎えるなかで、節約より消費が規範化された時代に向き合うことになる。またその結果、消費や節約をめぐる子どもや孫たちの間に「文化的境界」が形成されるのである。

しかし、その一方で、彼女たちは自分たちが身体化した「節約」のハビトゥスを子どもや孫に押しつけることをせず、戦後世代の消費文化に寛容な態度をとる。これに対して、同窓会の場はそれとは異なり、同じ「節約」のハビトゥスを共有する者たちが集う場であるため、たとえ孫子に理解されなくとも互いに安心しあえる「避難所」としての機能を果たす。また彼女らは同

窓会を通じて再帰的空間のなかで自らの「節約」という身体文化を再確認することで、子どもや孫の消費性向との乖離を確認し、互いを準拠棒として再調整することになる。

こうして高等女学校を戦時期に経験した同窓生のハビトゥスは、同窓会における集合的記憶の共同作業を通じて、その一部を当時の文脈から切り取り、現在の文脈で熟考・調整され、再び記憶の中に埋め込まれるのである。こうした集合的記憶の脱埋め込みと再埋め込みによって再構築された学校的身体文化によって現在の日常生活も再解釈される。黄（2002）によれば、同窓会活動とは、過去の学校的実践の再構築を通じて、集合的記憶によるハビトゥスの確認と変容が図られる場である。

### 1.3 女子ミッション教育で身体化された学校文化：西洋的リベラル・アーツのハビトゥス

黄（2002）が扱ったのは、北関東にある県立の高等女学校であったが、本研究では同じ地方でも私立の女子ミッション・スクールを対象とする。そして、東北初のミッション系女子教育機関<sup>1</sup>である宮城学院の戦前・戦後史を事例に、同窓会による記念誌の寄稿文の内容分析から卒業生の実践とその背後にあるハビトゥスおよび集合的記憶に焦点を絞って女子ミッション教育の変容を明らかにする。

黄（2002）が扱った高等女学校が、1899年の高等女学校令にもとづき、良妻賢母教育を標榜して各県に設置されたのに対して、女子ミッション教育が近代日本において極めて特異な位置を占めたことは、稲垣（2007）や佐藤（2006）によって指摘されてきた。それによると西欧的教養を志向する女学生文化は、しばしば地域社会において憧れや羨望的となる一方で、さまざまな批判・揶揄がなされていた。とくに高等女学校令がだされた明治30年代以降は、高等女学校の正当性の根拠は「良妻賢母主義」であった。

しかし、広田（1991：148-150）が丹波の篠山高等女学校の事例から明らかにしたように、実際の女学校の教育課程のなかでは、「良妻賢母主義」は、「教養主義」や「人格主義」などを曖昧に包含するものであった。こうした女学校の教育目標の不明確さや、「裁縫」から「英語」にわたる折衷的な教育内容は、かえって女学生に「実用」から離れた幅広い「教養」を享受する「自由」を与えた（稲垣，2007）。近代的・西欧的教養から日本固有の伝統的「立ち居振る舞い」に渡る「女学生文化」は、旧制中学・高校の男子学生に見られるような地位達成のための「規範としての教養主義（強迫的教養主義）」（片瀬，2005：238）ではなく、自然に身につけられたがゆえに「天性のもの」と「誤認」（Bouredieu et Passeron, 1979=1991）される「素養」として、憧れと羨望のまなざしでみられた。しかし、それは男子のように高等教育を通じて専門知や地位達成と結びつく途が制度上、閉ざされていたがゆえに、「虚栄」または「軽薄な教養」「結婚のための教養」として、しばしば非難の対象となっていた、という（稲垣，2007：37-39）。

実際、稲垣（2002：161）によれば、近代日本が西洋的文化・教養を受容していく際のジレンマを反映して、ミッション女学生には、ある種のアンビバレントな評価や感情が向けられたという。明治初期の欧化政策によってミッション女学生は増加していったが、同時に彼女たちは羨望とともに嫌悪の対象となっていた。というのも、高等女学校のように家事を切り盛りする良妻賢母を育てるのでもなく、伝統的な日本文化を教授するわけでもなく、音楽や英語といったリベラルな西洋的教養を教える女子ミッション教育は、明治半ばから台頭し始めた国粹主義を信奉する男性知識人にとって二重の意味で「他者」（2007：174）であったからである。彼らにとって、「ミッション女学生」は何よりも「他者としての西洋」（稲垣，2007：174）を表象させる存在であった。

このような「ミッション女学生」への反応を、佐藤（2006：136）は、

表1 増幅されるアンビヴァレンス

女学生×キリスト教=ミッション女学生		
	+ / 聖性	- / 魔性
女学生	近代教育←羨望	非女性的←批判
キリスト教	近代文化←憧憬	邪教←忌避

佐藤 (2006: 139)

「増幅されるアンビヴァレンス」として表1のように図式化している。すなわち、「女学生」は近代教育を享受する者として「羨望」の的になると同時に、「良妻賢母」規範から逸脱した非女性的存在として「批判」される。また、キリスト教は、西洋がもたらした「近代文化」を体現するものとして「憧憬」の対象となる一方、国民主義を脅かしかねない「邪教」として「忌避」されたのである。

こうして女子ミッション教育のもつ多義性は、明治期の日本社会における「世間」の目の多元性に対応していたのである。そして、明治期の近代化(=国民化)が、メリトクラシーと性別役割分業の徹底をもとめたとき、「学問する女性」は、その存在そのものが「境界越境的」であるために、社会秩序を潜在的に脅かす存在とみられたのである。

このような多義性・多重性をもつ女学校教育が育んだ女学生文化(ただし大正・昭和初期)については、稲垣(2007)によれば、女学生が接触する3つの文化圏との関連で位置づけることができるという。それによると、この時期の女学生は①近代的知識や西洋文明に立脚した「モダンな近代文化」、②伝統的な和漢の教養や茶道・華道・琴などからなる「たしなみ文化」、③とくに大正・昭和初期に都市部に成立し、雑誌や映画・ラジオなどのメディアを通じて地方にも伝播した「大衆モダン文化」である。

これら3つ文化圏を融合するかたちで形成された女学生文化は、しか

し、そのどれかを深く追求するという「専門性」には欠けていたので、「表層的」と言われることがあった。とくに当時、旧制高校を中心に制度化されつつあった正統的な「大正教養主義」からみると、どの文化領域についても深めることなく、部分的に摂取し折衷した表層的なものと批判される。そして、3つの文化領域（とくに「モダンな教養文化」や「たしなみ文化」）との重なる円が小さいほど、また「大衆モダン文化」との重なりが大きいほど、女学生文化は「軽薄」で「浪費的」「虚栄的」な文化として世間の指弾を浴びることになる。この点では、女学生文化は、良妻賢母的な実用性を欠くことだけでなく、その非正統性に関しても批判の対象になったのである。

しかし、稲垣（2007）は、こうした女学生文化への批判の背後には、そもそも近代日本における西洋文化受容の折衷性があると指摘する。すなわち、女学生文化を「折衷的」と批判し、「学問する女性」に違和感を表明する者（主として男性知識人）自身、漱石の講演の言葉を借りるまでもなく「上滑り」の近代文化受容をしてきており、女学生文化の折衷主義的な表層性に自らの姿を見出すことによって、感情的なりアクションを示している場合が少なくない、という。こうしてみると、ミッション女学生をめぐる表象は、当初の「他者としての西洋」というイメージから、やがて羨望と嫌悪をもたらすブランド・イメージへと変化していったが、この変化こそは「西洋的教養や文化を受容していく過程における、知識人のそうした自意識の変化を映し出す「鏡」であった」（稲垣，2007：218）といえるだろう。

## 2. 本研究の課題と方法

### 2.1 本研究の課題

本稿の目的は、こうした女子ミッション教育の歴史的な位置づけを踏まえて、宮城学院女子大学（宮城女学校）が戦前・戦後を通じてどのような歩みをたどったかを、同校の記念誌『期にいたりて実を結び』の内容分析を通じ

て探ることにある。同校は不幸にも戦災で戦前の資料を焼失させたが、この記念誌に寄稿した戦前の卒業生の中には「集合的記憶」として当時の学校生活が残っていることになる。ただし、記念誌の寄稿者で旧制の宮城高等女学校・女子専門学校を昭和初期までに卒業した者は12名にすぎず、稲垣(2007)のいう戦前期のモダンな教養主義的女学校文化を「集合的記憶」としてとどめている者は寄稿者のなかに多くはない。ただし、戦前のミッション教育を受けた彼女らの「集合的記憶」を合わせ鏡にして、戦後の宮城学院における女子ミッション教育の在り方が時代の中でどのように変貌したかを探ることはできる。

実際、職業技能や資格よりもリベラル・アーツを標榜する教育は、戦後の女子ミッション教育にも継承されていったと考えられる。戦後の1948年、学制改革により、女子も大学への入学が可能となった。その翌年、宮城学院は宮城学院女子大学(「学芸学部」の「英文学科」,「音楽科」2学科)の設置認可をうけ、高等教育に乗り出す。さらに、1951年、私立学校法の施行に伴い、学校法人の組織変更の認可申請を提出し、大学の教育目的を以下のように変えた。「本学は基督教に基づいて女子に大学教育を施すことを以て目的とする。…(中略)…特に北日本に於ける学術文化の向上と、社会及び家庭生活の改善進歩を実現し、且つ国際精神の育成につとめることを以て使命とする」(宮城学院, 1966: 62)。ここには、キリスト教精神のもと「リベラル・アーツ」教育を行うことが明示されている。ただし、この当時、女子の高等教育進学率は5%程度であったから、このような教育の恩恵を受ける者は限られていた。

しかし、1969年年には女子の高等教育進学率も15%とトロウ(Trow, 1971=1976)のいう「マス段階」に、2006年には50%をこえ「ユニバーサル段階」へと到達した。トロウ(Trow, 1973=1976)も指摘するように、高等教育の拡大は単なる量的問題にとどまらず、大学教育の質的転換をもた



らす。とりわけ「マス段階」から「ユニバーサル段階」に到達することによって、高等教育の主要な機能は「専門分化したエリート養成と社会の指導者層の育成」から「産業社会に貢献しうる全国民の育成」に移行し、入学する学生の多様化によって、構造化された教育課程が弾力化せざるをえなくなる、という (Trow, 1973=1976)。こうした入学者の多様化に伴って、職業教育や資格取得も含めたカリキュラムや学科構成も再編を余儀なくされる。つまり、「リベラル・アーツ」を伝統的に標榜してきた女子ミッション教育にも、職業教育や職業資格の取得をはじめとする多様な要望をもった学生が入学することとなる。加えて、18歳人口の減少に伴う大学間競争と相まって、カリキュラムの再編や改組の波が押し寄せようとしている。こうした戦前期から今日に至る宮城学院女子大学および同短期大学の歩みを同窓生の寄稿文の内容分析を通じて明らかにしようというのが本稿の目的に他ならない。

## 2.2 本研究で用いるデータと方法

本研究で分析の対象とするのは、先にも触れたように、宮城学院が、創立110周年、120周年、130周年を記念して同窓生の寄稿文を編んだ3冊の記念誌『期にいたりて実を結び』である。この記念誌は、宮城学院創立110周年を記念した第1集（「期にいたりて実を結び」編集委員会、1991）、120周年を記念した第2集（「期にいたりて実を結び第2集」編集委員会、2009）、そして130周年を記念して編まれた第3集（「期にいたりて実を結び第3集」編集委員会、2016）からなり、戦前の卒業生から近年の卒業生までのべ106名が寄稿している。このうち第1集は、戦前の宮城女学校および宮城学院中学・高校の卒業生による寄稿文を中心に編まれているのに対して、第2集、第3集はこれに加えて短期大学と大学の卒業生からの寄稿文も収められている。今回は、このうち宮城女学校・宮城学院女子大学および短期大学の卒業生による寄稿文を扱う。

今回の分析で用いる手法は「テキスト・マイニング」と呼ばれるものである。テキスト・マイニングとは、近年、社会科学やマーケティングの分野で使われるようになった内容分析の手法で、とくにテキスト型のデータ(文章)をコンピュータに取り込み、そこから語彙を抽出してその間の関係を調べ、それをもとにさまざまな統計的手法(たとえば多変量解析の手法であるクラスター分析や対応分析など)を用いて、テキストの構造を探索的に分析する手法を意味する。実際の分析例としては、衆議院選挙の争点をめぐる三大新聞紙の社説の比較検討(鈴木, 2008), 新興宗教の青年信者の「体験談」をもとにした霊能者への帰依の深化過程の分析(秋葉・川端, 2004), 漱石の『こころ』の「死」をめぐる語彙の分析から「先生」の自死の記述が不自然になされているわけではないことを指摘した研究(樋口, 2003)など多岐にわたる。

テキスト・マイニングに利用することのできるソフトウェアにもいくつかのものがあるが、今回はKHcorder(樋口, 2014)を用いる。このソフトウェアは従来のテキスト・マイニング・ソフトの利点を接合することで①多変量解析によって分析者のもつ理論や問題意識の影響を極力受けない形で、データを要約・提示する、②コーディング・ルールを作成することで、同時に理論仮説の検証や問題意識の追及を行う、といった特徴をもつ(樋口, 2014: 19)。

### 2.3 記念誌寄稿者のコーホート

実際の記念誌の内容分析(テキスト・マイニング)に入る前に、記念誌に寄稿した同窓生をその卒業年次によっていくつかのコーホート(世代)に分けておく必要がある。というのも、本稿の目的は、同窓生の寄稿文の内容分析を通じて宮城学院の教育が卒業生の「集合的記憶」に及ぼした影響の変化を明らかにすることにあるためである。そのためには、卒業時期ごとに寄稿

表2 記念誌寄稿者の卒業コーホート

コーホート	卒業年次		寄稿者数 (のべ)
コーホート1	1909-51年	旧制高等女学校・女子専門学校時代の卒業生	24
コーホート2	1952-79年	新制女子高等教育の始まり (二番町校舎入卒業者)	26
コーホート3	1980年～	女子高等教育の展開 (桜ヶ丘校舎卒業者)	20

文を分け、その内容の違いを比較する必要がある。本研究では、記念誌3集に寄稿した同窓生(旧制高等女学校・女子専門学校から新制大学・短大卒)を卒業年次によって表2のように3つのコーホートに区分した。

このうち戦後の2つのコーホートは学んだ校地も違うが、同時に女子高等教育の転換期とも重なっている。本格的な女子高等教育は、戦後に始まったが、この時期の女子の進学率の上昇を支えたのは、4年制大学への進学よりも短期大学への進学であった(尾嶋, 2002)。宮城学院でも、1949年に4年制大学が、翌50年に短大が設置されるが、1950年の入学者をみると、大学英文科が55名、音楽科が9名で計64名、短大は家政科が65名、国文科が46名と計111名と短期大学の入学者の方が多かった(宮城学院, 1987)。設置された学科も「英文学科」、「音楽科」、「家政科」、「国文科」といったいわゆる「女子向きコース」であり、「ジェンダー・トラック」(中西, 1998)を構成するものであった。実際、この時期の女性の年齢別就労曲線をみても(内閣府男女共同参画局, 2013)、典型的なM字型曲線を描いている。つまり、コーホート2が卒業した時代は、女性は女子向き教養を身につけ、卒業後、就労はするが結婚もしくは出産後、退職して家庭に入ることが標準的なライフコースであった。

これに対して、第3コーホートが卒業期を迎える時期の後半、とくに1990年代に女子の進学率が上昇するが、それを支えたものは短大進学よりも4年制進学であった。先にも述べたように、大学進学率の上昇すなわち

大学の大衆化に伴い、多様な希望をもった学生が大学に入学してくる。こうした希望にこたえるべく、宮城学院女子大学の場合も、1994年に「人間文化学科」、1999年に「食品栄養学科」「生活文化学科」「発達臨床学科」「国際文化学科」を新設し、2000年に学芸学部の改組で新4学科（国際文化学科、発達臨床学科、食品栄養学科、生活文化学科）体制となり、さらに2007年に心理行動科学科、児童教育学科を設置、2016年には4学部（現代ビジネス学部、教育学部、生活科学部、学芸学部）の開設が行われた。その一方で、2001年、短大離れの中、短期大学が廃止された。この時期、男女雇用機会均等法の制定と改正もあり、前のコーホート2とは異なり、家庭と仕事を両立しつつ、大学で身につけた専門知識を生かすキャリアを展望する卒業生が増えたと考えられる。

### 3. 記念誌の内容分析

#### 3.1 各コーホートに多く用いられた語彙

上記のような卒業生の動向を踏まえて、まず3つのコーホートの特徴を把握するために、それぞれのコーホートの寄稿文で多く用いられる語彙を見てみよう。KHcorderは品詞ごとにテキストで用いられる語彙を抽出し、カウントする機能をもっている。動詞や形容詞では使われる文脈によって意味が異なるので、名詞についてコーホートごとに使われる頻度の多かった名詞を集計した（表3）。

それによると、同窓生の寄稿文であるため、上位には「先生」「学校」「時代」「大学」などの語が共通して並んだ。むしろ各コーホートの特徴が表れるのは、それ以降の語であり、コーホートごとにそのコーホートで特徴的に上位に来る語に着目しながら各コーホートの特徴をみると以下のような（カッコ内は出現頻度）。

まず、コーホート1では、西欧的教養にかかわる「音楽」(40)、「英語」

表3 各コーホートの頻出語 (20回以上)

コーホート1		コーホート2		コーホート3	
語彙	頻度	語彙	頻度	語彙	頻度
先生	170	先生	82	先生	82
学校	72	時代	53	教育	82
時代	52	大学	47	時代	53
自分	43	女性	45	大学	47
音楽	40	自分	43	女性	45
生徒	36	学校	36	自分	43
英語	30	茶道	31	学校	36
聖書	29	音楽	29	感謝	36
精神	28	家族	28	生活	34
母校	28	子ども	25	茶道	31
教会	26	社会	25	音楽	29
学生	25	人生	25	家族	28
ピアノ	23	学生	24	卒業	27
女子	23	学科	21	入学	26
女学校	22	委員	20	子ども	25
キリスト教	21	英語	20	社会	25
女性	21	思い	20	人生	25
婦人	21	母校	20	学生	24
演劇	20			学科	21
				委員	20
				英語	20
				思い	20
				母校	20

(30), 「ピアノ」(23) およびキリスト教にかかわる「聖書」(29), 「教会」(26), 「キリスト教」(21) などが多く使われている。これに対して, コーホート2では, 前のコーホートでみられたキリスト教にかかわる語はみられず, 西欧的教養にかかわる「音楽」(29)「英語」(20)も頻度が減り, 代わって伝統的日本文化にかかわる「茶道」(31)が入った。また前のコーホートになかった「家族」(28), 「子ども」(25)が出現した。「女性」(45)も

頻度が増えた。最後に、コーホート3では、頻出語はコーホート2と大きく変わらないが、「感謝」(36)、「生活」(34)など新しい語彙も増え、関心の多様化がみられる。また前のコーホートで現れた「女性」(45)も引き続き上位にある。

### 3.2 各コーホートに特徴的な語彙

表3は寄稿文で用いられた語の頻度から各コーホートを特徴づけたが、コーホートと語の関連の強さを表す Jaccard の類似度測度<sup>2</sup>を用いてコーホートを特徴づけることもできる。表4は各コーホートとの関連性の強さからコーホートを特徴づける語の上位10位を示したものである。

表3と同じく学校生活を表す語が上位に来るが、戦前期のコーホート1では「音楽」や「ピアノ」、「聖書」や「教会」といった西欧的・キリスト教的教養を表す語が特徴的となっている。これに対して、戦後のコーホート2になると、これらの語は上位10からなくなり、「家族」や「子ども」、「女性」、「人生」といった語が入ってくる。先にみたように、この時期の女性にとっ

表4 Jaccard 測度による各コーホートに特徴的な語

C1		C2		C3	
先生	.105	時代	.044	自分	.090
学校	.052	大学	.033	英語	.059
時代	.037	女性	.032	大学	.035
音楽	.030	家族	.024	生徒	.035
生徒	.029	人生	.023	学生	.032
聖書	.024	茶道	.022	音楽	.027
母校	.023	社会	.022	言葉	.027
精神	.020	子ども	.020	文化	.025
ピアノ	.019	母校	.018	国際	.022
教会	.019	思い	.017	コミュニケーション	.020

注) 数値は Jaccard の類似度測度

ては、結婚・出産を機に家庭に入るというのが標準的なライフコースであったことの反映といえるかもしれない。また「茶道」という語もこのコーホートのみに現れる。これに対して、1980年代以降に卒業したコーホート3では、「英語」「言葉」「文化」「国際」「コミュニケーション」といった語が新たに出現してくる。英語などの言語を生かして国際的なコミュニケーションにかかわる仕事についての卒業生が増えつつあることがうかがえる。

### 3.3 記念誌全体の構造分析

最後に、以上の知見を踏まえて、記念誌3集にわたる語句の付置関係を対応分析<sup>3</sup>という手法で分析し、そのなかで3つのコーホートがどのような位置を占めるか確認しておく。対応分析とは、質的な変数（たとえば語彙）のクロス集計表をもとに、それぞれの変数の位置を二次元の散布図に位置付けることで、変数全体の見取り図を描き出す手法である<sup>4</sup>。

記念誌3集に収められた文章をもとに、対応分析を行った結果は図1に示した。また、3つのコーホート（C1～C3）とその周辺に位置する語を円で囲み、C1からC2を経てC3に至る経路を矢印で示した。

まずコーホート1の周囲には、「礼拝」、キリスト教、「聖書」、「教会」、「女子」といった女子ミッション教育や、「ピアノ」といった西欧文化に関する語が並ぶ。これに対して、コーホート2の円には「人生」「社会」「家族」「女性」「茶道」など多様な語が入っている。対応分析の散布図の縦軸（第二軸）は主としてコーホート1と2を弁別する軸であるが、語の配置からみて、第二軸+の方向（上）は西欧的・キリスト教的文化・教養を示し、-の方向（下）は日本の・家族的文化・教養を表すものと解釈できる（二軸の一番下には「茶道」がある）。

これに対して、コーホート3の円には「自分」、「環境」、「経験」などに加えて「英語」、「外国」、「会社」、「仕事」、「研究」といった語が含まれる。

## 集会的記憶の文化社会学

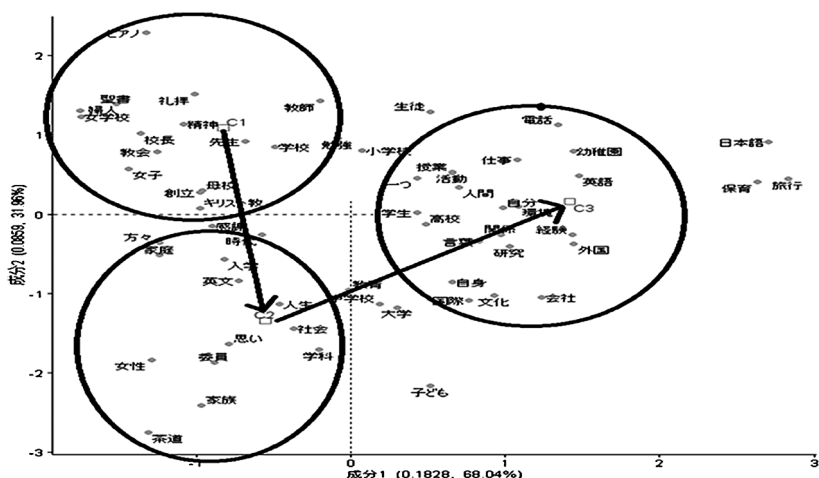


図1 記念誌の対応分析

ここでは英語などを活かして海外で仕事をしたり，教育・研究活動をするといった専門職的なスキルが含まれる。第一軸(横軸)は原点を中心に見ると，このコーホート3をコーホート2および1から区別するものであるから，+の方向(右)に専門職的な女性のライフスタイル，-の方向(左)にキリスト教的文化と家族的文化が位置することになる。またコーホート3は第二軸に関しては，コーホート2に比べて+の方向(上)に位置するので，前のコーホートに比べて，西欧的・キリスト教的文化への回帰がみられるとしてよいだろう

## 4. 結論と展望

以上，記念誌に投稿された同窓生の寄稿文を3つのコーホートごとに分析することで，戦前期から現代にいたる宮城学院の教育あるいは文化資本の伝達の一端を明らかにすることができた。それによると，戦前期は西欧的・



キリスト教的文化資本が支配的な学校文化となっていたのに対して、戦後前期は結婚・出産後は家庭に入るという女性の標準的なライフコースを反映して、日本的・家族的な文化が同窓生の集合的記憶として語られていた。最後に最も新しいコーホート3では、英語などを活かして国際的な仕事や教育・研究活動をするといった専門職的なスキルが大学教育に求められるようになった。

冒頭にも述べたように、歴史的にみると、ミッション・スクールは、高等女学校令の良妻賢母主義にあらがう形で、実学よりもキリスト教を中心とした西欧的リベラル・アーツの教授を標榜してきた。しかし、戦後になると女子ミッション教育を取り巻く環境は大きく変わり、女子大学もその変化に対応する形で再編を余儀なくされてきた。とくに戦後は、女性の社会進出がすすみ、1985年の男女雇用機会均等法の制定および97年の同法の改正によって、女性が男性並みに働く法的環境が整った。ところが、1990年代初頭のバブル崩壊から長きにわたって続いた不況は、大学生わけでも女子大学生の就職難をもたらし、「超氷河期」という言葉さえ生んだ。さらに2005年には日本人口は戦後初めて自然減に転じ、本格的な少子化時代を迎えた。こうしたなかで、大学間の競争も激化せざるを得ず、それへの対応も求められる。宮城学院女子大学も2016年に1学部10学科から、4学部（現代ビジネス学部・教育学部・生活科学部・学芸学部）9学科へと学部学科の大幅な再編を行った。これによって、専門知識・技能を身につけ、就職の面でも他大学との競合に勝ち抜く大学を目指したものと思われる。

たしかに、女性がその能力を生かして長く働き続けるには、専門的な知識やスキルを身につける必要があることは言うを俟たない。またそれを証明する資格を取得することも不可欠であろう。しかし、そうした専門的知識やスキルも、リベラル・アーツに代表される教養によって基礎づけられるとき、はじめて生きた「知」となることも事実である。その意味で、ミッション・

スクールがずっと保持し、教授してきたリベラル・アーツ＝教養の伝統は今後の大学教育に引き継がれていくべきものであろう。

かつてプロテスタンティズムの禁欲倫理が、勤勉な労働生活を生むことで、結果的に資本主義の精神を形作ったという歴史の逆説を明らかにしたマックス・ウェーバー (Max Weber) は、その著作 (Weber, 1905=1989) の末尾に「精神なき専門人」が出現する危惧を述べた。それによると、もともと宗教的倫理に裏打ちされていた経済活動から倫理が失われることによって、あくなき営利の追求が「精神なき専門人」によって行われることになる。その結果、手段を選ばぬ過酷な競争がおこなわれることになる。この営利追求の競争という資本主義の「鉄の檻」のなかで、かつては資本主義の精神であった「天職への献身」「勤勉の美德」を失ったまま、「精神なき専門人」として生きる無価値な人間になってしまうという。

翻って、これからの女性が、大学で身につけた能力を活かしてグローバル化した世界で活躍していくためにも、専門的知識とともに、人間への洞察や倫理をもたらすリベラル・アーツは不可欠のものと言える。宮城学院女子大学が戦前の宮城女学校・女子専門学校以来、継承してきたキリスト教にもとづくリベラル・アーツは、今後も大学教育の基礎として継承されるべきものと考えられる。

#### 《謝辞》

本稿執筆にあたり、何よりもまず分析に用いた記念誌『期にいたりて実を結び』の1集から3集までをご恵存くださいました宮城学院同窓会に厚く御礼申し上げます。この資料なくしては本稿の分析ができなかったことは言うを俟ちません。この記念誌のスキャナ入力と文字化の作業は、東北学院大学大学院人間情報学研究科の帖佐和加子さん・及川健弥さんの手を煩わせました。また KHcorder による分析に際しましては、小林信重東北学院大学教

養学部准教授よりご教示をいただきました。併せて御礼申し上げます。

《文献》

- 秋葉裕・川端亮, 2004, 『霊能のリアリティへ—社会学, 真如苑に入る』新曜社.
- Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction: Critique sociale du Jugement*. Éditions de Minuit (= 1989, 石井洋二郎訳『ディスタクシヨ I -社会学的判断力批判』新評論).
- , 1980, *Le Sens Pratique*. Éditions de Minuit (= 1988, 今村仁司・港道隆共訳『実践感覚 1』みすず書房).
- et Jan-Claud Passeron. 1979, *La Reproduction*. Éditions de Minuit. (= 1991, 宮島喬訳, 『再生産』藤原書店).
- Clausen, Sten-Erik, 1998, *Applied Correspondence Analysis: An Introduction*, Sage Publication (= 2015, 藤本一男訳・解説『対応分析入門—原理から応用まで—解説 R で検算しながら理解する』オーム社.
- 黄順姫, 2002, 「高等女学校同窓会の身体分科—戦時期の実践と記憶の再構築メカニズム」稲垣恭子・竹内洋共編『不良・ヒーロー・左傾—教育と逸脱の社会学』人文書院: 207-237.
- Halbwachs, Maurice, 1968, *La mémoire collective*. Presses Universitaires de France (= 1989, 小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社).
- 樋口耕一, 2003, 「コンピュータ・コーディングの実践—漱石『こころ』を用いたチュートリアル」『年報人間科学』24: 193-214.
- , 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.
- 広田照幸, 1991, 「学校文化と生徒の意識」天野郁夫編『学歴主義の社会史—丹波篠山にみる近代教育と生活世界』有信堂; 135-522.
- 稲垣恭子, 2002, 「不良・良妻賢母・女学生文化」稲垣恭子・竹内洋共編『不良・ヒーロー・左傾—教育と逸脱の社会学』人文書院: 110-132.
- , 2007, 『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社.
- 片瀬一男, 2005, 『夢の行方—高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会.
- , 2009, 『明治期の東北地方における女子ミッション教育の社会史』(平

## 集合的記憶の文化社会学

- 成18～20年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））（課題番号18530396）研究成果報告書）。
- 「期にいたりて実を結び」編集委員会，1991，『期にいたりて実を結び』宮城学院中学校・高等学校。
- 「期にいたりて実を結び 第2集」編集委員会，2009，『期にいたりて実を結び 第2集』宮城学院。
- 「期にいたりて実を結び 第3集」編集委員会，2016，『期にいたりて実を結び 第3集』宮城学院。
- 近藤博之，2011，「社会空間の構造と相同性仮説—日本のデータによるブルデュー理論の検証」『理論と方法』，26(1): 161-177。
- 宮城学院，1965，『宮城学院80年小史』宮城学院。
- ，1987，『天にみ栄え—宮城学院の百年』宮城学院。
- 内閣府男女共同参画局，2013，『平成25年版 男女共同参画白書』内閣府。  
[http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-10.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-10.html)
- 中西祐子，1998，『ジェンダー・トラック—青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版。
- 尾嶋史章，2002，「社会階層と進路形成の変容—90年代の変化を考える」『教育社会学研究』70: 125-142。
- 佐藤八寿子，2006，『ミッション・スクール—憧れの園』中央公論新社。
- 鈴木努，2006，「二〇〇五年衆議院選挙における三大紙の社説比較—概念ネットワーク分析の適用」『マス・コミュニケーション研究』69: 2-21。
- Trow, Martin, 1973, "Problem in the Transmission from Elite to Mass Higher Education." OECD (ed.), *Politics for Higher Education*. (=1976. 天野郁夫・喜多村和之訳「高等教育の構造変動」『高学歴社会の大学—エリートからマスへ』東京大学出版会: 53-123).
- Weber, Max, 1905, *Die protestantische Ethik und der »Geist« des Kapitalismus*<sup>1</sup> (= 1989, 大塚久雄訳『プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店)。

### 〈注〉

- 1 東北地方では、ともに1886年に宮城女学校（現・宮城学院女子大学）と弘前女

学校（現・弘前学院大学）が設立され、東北地方における女子ミッション教育の嚆矢となった。いずれもプロテスタント系であるが、宮城女学校がドイツ改革派教会の流れをむくのに対して、弘前女学校はメソジスト派に属した。弘前女学校については（片瀬，2009）参照。

- 2 Jaccardの類似度測度とは、自然言語処理の分野で2つの文書の類似度を測る測度であり、それぞれの文書を語の集合と見なした場合、2つの集合に共通する語（積集合となる要素）の数が2つの文書の要素の和集合（語全体）に占める割合で定義される。2つの文書が共通の語を多く含む類似度が高いほどJaccardの類似度測度は1に近づく。KHcoderではJaccard類似度測度 = 「語Aを含む」かつ「語Bを含む」文書の数 / 「語Aを含む」か「語Bを含む」か一方でも当てはまる文書の数 で定義される測度である。（<https://www.slideshare.net/khcoder/jaccard1>）。
- 3 対応分析については、（Clausen, 1998 = 2015）などを参照。この対応分析をさらに発展させ、複数のカテゴリカルな変数からなる水準間の関係をもとに多次元空間を構成する手法に多重対応分析（MCA）がある。社会学における適用例としては、ブルデュー（Bourdieu, 1979 = 1989 : 192-193）による「社会的位位置空間と生活様式空間」の分析がある。彼は、変数間の因果的な連鎖から社会構造を説明する「変数主義」を批判し、多重対応分析によって社会空間を表現することで、現代社会の階層構造を明らかにしようとした。ブルデュー（Bourdieu, 1979 = 1989）にとって、社会空間こそ社会の基本的な構造であり、その次元は資本総量と資本構成の2つである。また、資本総量が同じでも、どんな種類の資本をどの程度、保有しているかで個人の社会的位位置が決まってくる。社会空間を構成する2次元の資本とは経済資本と文化資本だが、経済資本が大きくなると文化資本が小さくなり、反対に文化資本が大きくなると経済資本が小さくなるというパターンがフランス社会では観察される、といわれる。また、日常生活における慣習的行動も、この社会空間の構造に対応したものになると予想される。すなわち、社会空間における資本総量と資本構成が、生活様式空間における慣習的行動（趣味など）の布置を決定づける、という（Bourdieu, 1979 = 1989）。こうしたブルデュー（Bourdieu, 1979 = 1989）の社会空間アプローチを日本社会の階層構造に適用したものとしては、近藤（2011）がある。近藤（2011）は、日本社会では、社会空間の構造や慣習的の

動、意識空間との相同性については、資本総量の分化軸が明瞭にみいだされたが、資本構成による差異はそれほど明瞭でないことを指摘している。

- 4 対応分析で個々の言葉の位置は次のように決定される。すなわち、まず語と語のクロス集計表を作成する。その際、クロス表のレイアウトとしては、集計したい項目（語）が各列に並ぶよう配置し、分類したい調査項目（語）を各行に並ぶよう配置する。たとえば、「保育」という語を集計したいならば、他のすべての語をこの語と同じ文に出てくるか、出てこないかで行に配置したクロス表を作成する。そのうえで、クロス集計の行と列の相関係数が最大になるように、行と列の順序の距離を求め、二次元の図の中で付置する場所を決定する。詳細は（Clausen, 1999=2015）参照。